

自主課題研究 「希望を創る環境学習を求めて」

地球と私たちをつなぐ 「地球市民皆農」社会へ
カルティベイティブ・ラーニング (CL学習): 農から「善く生きる」
Cultivative Learning

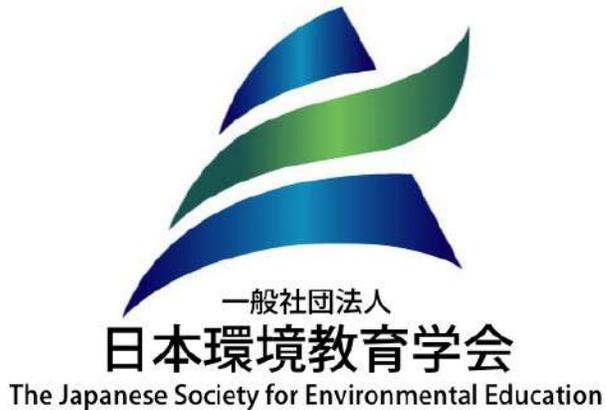
日本環境教育学会 第35回年次大会(千葉)

於: 江戸川大学・駒木キャンパス E棟2F B会場212講義室
(千葉県流山市駒木474)

2024年9月1日(日)

一反百姓「じねん道」(斎藤ファミリー農園)

上智大学 基盤教育センター 身体知領域 / 非常勤講師
家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン(FFPJ) 常務理事



斎藤博嗣
さいとう ひろつぐ
SAITO Hirotsugu

◎目次

- ① はじめに: 自己紹介 一反百姓「じねん道」(斎藤ファミリー農園)
- ② 日本における農業・農村の今と国際化する農業問題との共通課題を探る
- ③ 農≠農業 だけではない「農的ワーク・ライフ・バランス」
- ④ 2014年「国際家族農業年」(IYFF)
@小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン(SFFNJ)
2019~28年「家族農業の10年」(UNDFE)
@家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン(FFPJ)
- ⑤ 地球市民皆農～農から「善く生きる」
私の提案「カルティベイティブ・ラーニング」(*Cultivative Learning*)

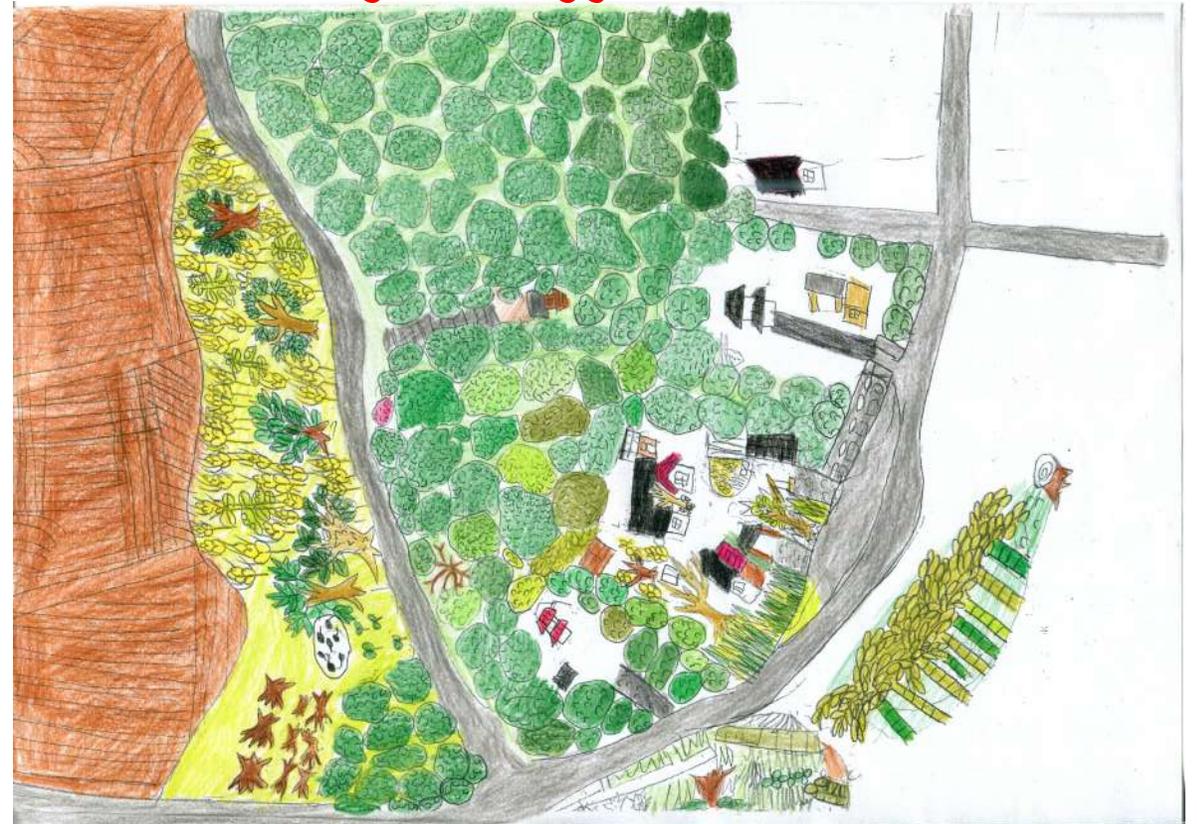
一反百姓「じねん道」(斎藤ファミリー農園)

2005年 東京から阿見町の農村に移住、新規就農
夫婦・子ども2人で営む、小さな家族農園



●「じねん道」は、『緑の百姓哲学』の実践

- 小さな田畑山林に、手足を使って、種を蒔き、失われつつある地球環境を回復し、次の世代に引継ぐ、永続的な非暴力農法による
- 「地球を生かす農」「地球で生きるための農」「アグロエコロジー」の実践
(*Agroecology*: 農業生態学)



●じねん道は新規就農(20年前)
「一反の田畑(300坪=1000m²)」で、
手足腰で鎌一本から「福岡正信・自然農法」をスタート

- ・「一反」は無尽蔵の時間と空間が展開される野良
- ・灌木、低木、高木が生えれば、たくさんの生物が住む
- ・一反の田畑から、鳥や風によって周辺に種が蒔かれ、種が飛交い、多様性をもたらす
- ・自然の普遍的な“はたらき”を頼り、一反の田畑がしっかりと手足のサイズでできること
- ・1町(=10反≒1ha)もできる、自ずから(じねん)から自然農園を完成させていくことが目標



●福岡正信・自然農法

・「地球で生きるための農」であり「地球を生かす農」でもある

不耕起

耕さない

自然(植物の根、微生物や"みみず"などの生きものたち)が耕しているので人の手は加えない。

無肥料

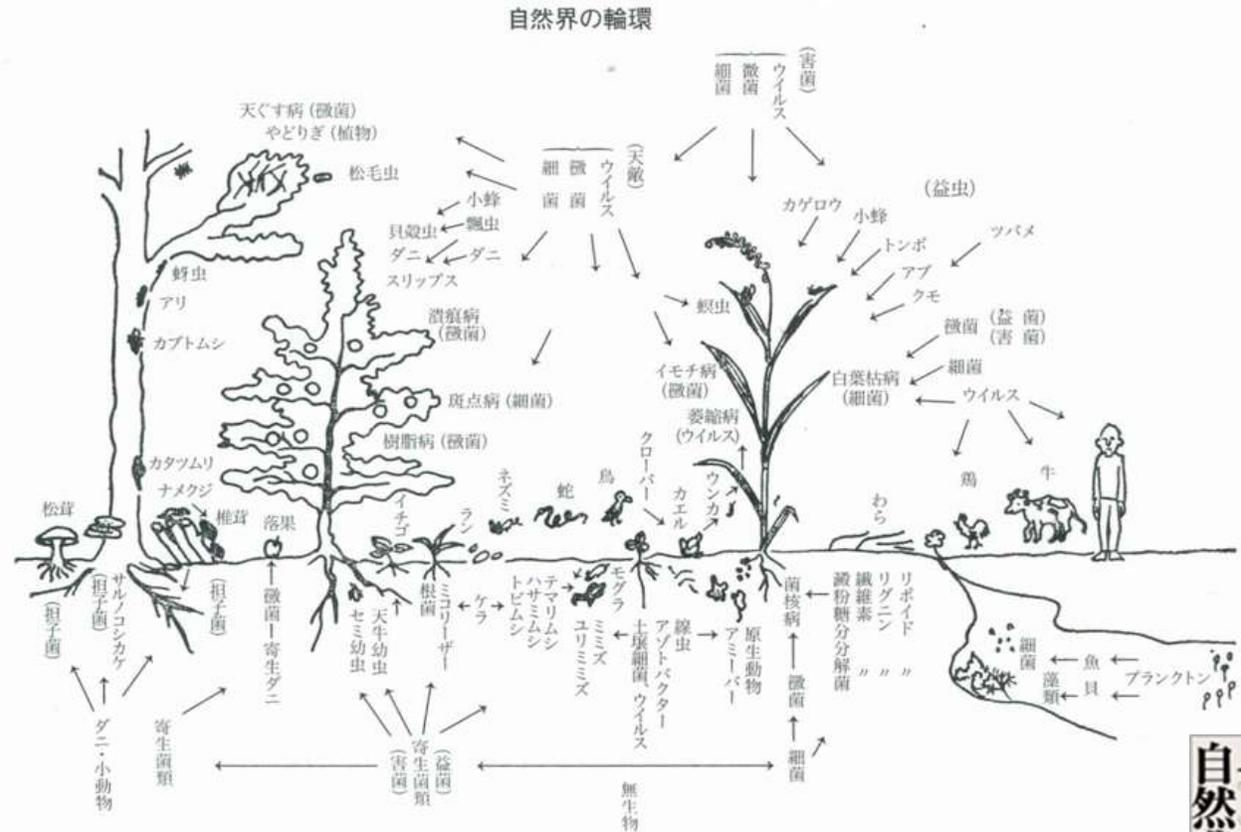
土を信頼して土に任せる

無除草

草のことは草に教わる

無農薬

虫などの生きものと共に



『無Ⅲ自然農法』福岡正信著・春秋社1985年



②

日本における農業・農村の今と
国際化する農業問題との共通課題を探る

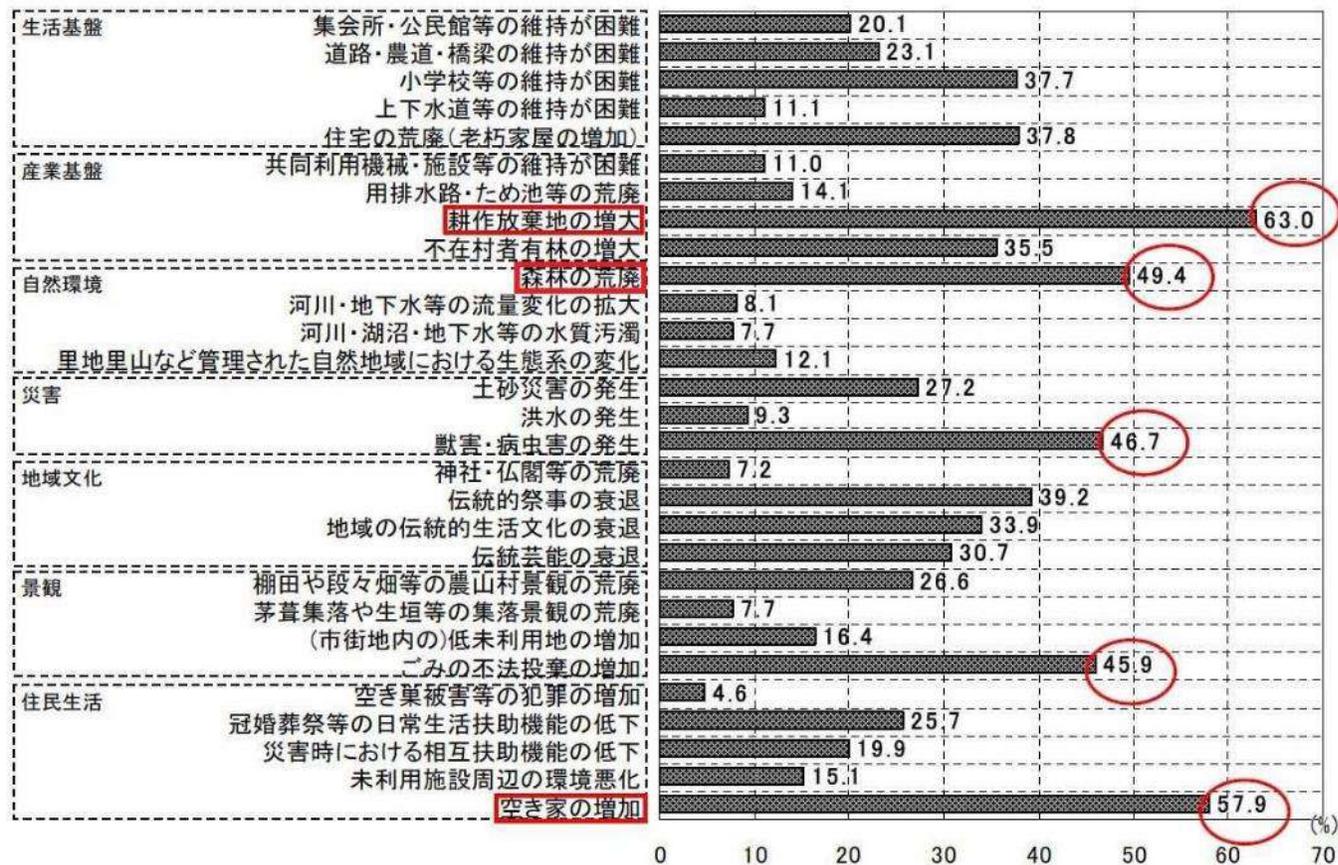
●耕作放棄地で、太陽光パネルばかり増える農村

- ・太陽光パネルの管理のための除草剤など土壌は大丈夫なのか？
- ・周辺の気温上昇、太陽光パネル自体が暴風によって飛ぶ事例も
 - ・電気を発電するために「土」と「太陽」を使うべきなのか？
- ・自然エネルギーの良い側面だけ強調、周辺地域を脅かす構造は原発と同じ



●「耕作放棄地の増大」「森林の荒廃」「空き家の増加」・・・ 過疎地域等の集落で発生している問題や現象・全国的な傾向

多くの集落で発生している問題や現象〔複数回答〕(市町村担当者へのアンケート結果)



農業や農村に対する若者のイメージ

[15K]

きつい

稼げない

きたない

家父長制

危険

過疎化

カッコ悪い

結論が出ない

カースト

結婚できない

高齢化

後継者不足

個人主義はNG

血縁強すぎ

教育の環境？

●「若者の農業・農村離れは、世界的に問題化」



農 ≠ 農業だけではない

作物を作る＝生産者という議論を超え、 未来の農(民)像を模索する

- 全世界的に起きている「担い手不足」は、「農業」だけの問題ではない
- 「農」へのアプローチ方法の誤りを分析し、根本的に作り変える作業が必要
- 「地」を土壌としてのみ捉えるのではなく、自然と双方向のメッセージ伝達の場
- 自らの生活が社会的な影響を与える仕事として農業が展開されるべき

⇒ 人々の生活に「農」取り戻すこと！
どのような取組みが必要か？

真の「カルティベーター (Cultivator): 耕作者」の育成

- 農に関する「ローカルな知」は、農家の土地に根差した経験の蓄積からなり、生存の必要から生まれた「生活知」「在来知」「伝統知」「実践知」として練られた「身体知」
- 農業を斜陽産業と考える「上から目線」ではなく、頻発する災害など混迷の時代だからこそ、生きる上で本当に必要なことを身につけている農家から学ぶ「地に着く」姿勢が重要
- ▶ 農を個人的職業ではなく、社会的事業だと考える地域の土壌から醸成される、真の「カルティベーター (Cultivator): 耕作者」の育成は、地方創成に留まらず、世界の永続可能な社会をも創成

③

農≠農業 だけではない
「農的ワーク・ライフ・バランス」

【農的ワーク・ライフ・バランス】

「農 ≠ 農業だけではない」を実現する小規模・家族農業

- ワーク(仕事) + ライフ(生活) = 暮らし(人生)には、“農”が必要不可欠
- 仕事と生活の距離、家族の距離、命あるものと距離を縮める、縦横無尽に協力し合える関係性
- 仕事と暮らしを分断せず「田畑、山林、庭、家屋」という農のフィールドと実生活を共有
- 自然に寄り沿ったバランスを図り、理詰めで組み立てず、自ずから調和がとれてくるマネジメント



老若男女共同参画

家庭円満農業

「家庭関係を大切に できる農のあり方」





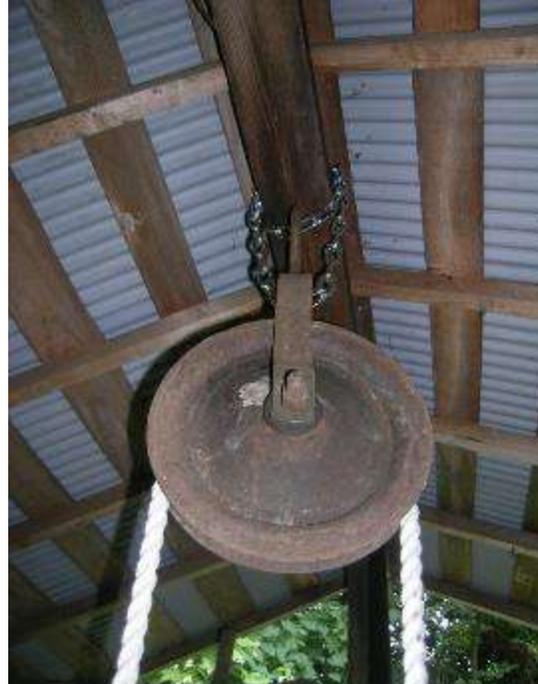
こども農業雑誌
『のらのら』No.17
農文協2015年冬号



百姓は、24時間、365日、自学自習



暮らしが仕事、
仕事暮らし



五感すべてをとぎすませる野良仕事





五感すべてをどぎすませる野良仕事

野良仕事の中から等身大の自分に気づく





田のドジョウ、畑の草が先生で、ここが学校、青空教室。





農≠農業 だけではない

レジリエンス(resilience):「地力」

- 「もちろん」現金収入という部分は必要・・・
 - ⇒必ずしも現金収入だけが生きていく道ではない
 - ⇒バッファ(「余裕」「ゆとり」)を持たせる
- 自分が会社を辞めたり、心を病んだり、不登校になったり、自分の生活を支える手段というものは、必ずしも会社や学校だけではない・・・
 - ⇒もっと広く多様なソサエティとしての農業・農村
 - ⇒食べものを自給できれば、自分の生活の何%かはクリア

農業を職業としての農業だけじゃなく、自分の生活を維持したり、体を大切にしたり、人としての基本的な心と体の健康、生涯に渡るライフプランとしても「農的生活」はある

農の持つ生き延びる力「**レジリエンス(resilience):「地力」**
自分の身体を使って精神をしなやかに回復し、乗り越える力



「共育」「響育」
親も子もネコも、
共に響き育つ！





自然からの宿題：ヘビとネコとわたしの時間





他者との比較ではない、
自然の力(Jinendo)
を身につける
「じねん童」

インフォーマルな 小規模・家族農業は「ひとつの学校」

- 文部科学省が学習指導要領で、一人の人間としての資質や能力を指す力「知・徳・体のバランスのとれた力」の総称とした理念「生きる力」
- 「生きる力」を身につけるためには、その本質「生の原点」である「生命」に立ち還って学習する必要がある
- ◆ 子どもたち『じねん童』は、五感すべてをとぎすませる農を通じ、身の丈を知り、自らを治め地に従う自制心を養い、他者との比較ではない、自然の中で自分自身を育てる力『Jinendo』を身につける

自然は無教育にして最大の教育者 (nature as co-techer)

- ◆ 今の時代はあまりにもモノが増えすぎ、便利になりすぎて、欲望に従って世の中が動いている。大切なことは、頭だけではわからず、目にも見えない
- ◆ 自耕・身体を使って、根を深く張り枝葉を広げ、地球と地域という故郷を未来の世代へつなぐ想いで小規模・家族農業をしている



表彰式

金融と経済小論文

第21回金融と経済を考える高校生小論文コンクールで、霞ヶ浦高1年の齋藤彩葉さん(16)が特選の日本銀行総裁賞に輝いた。齋藤さんは「自分の考えや思いが評価され、うれしい。自信につながった」と話した。

地元・阿見の課題考察

齋藤さん(霞ヶ浦高) 日銀総裁賞

2023 特選 日本銀行 総裁賞

第21回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

自分の足元から考える環境と経済の両立

茨城県・霞ヶ浦高等学校 1年 齋藤 彩葉

私は、田畑と森林に囲まれた自然豊かな農村で生まれ育った。1日にバスが2本しか出ない。また近くのお店と言えば、およそ2キロメートル離れたコンビニエンスストアだ。小学校は約3キロメートル離れた場所にあり、6年間地域の車で歩いて登下校していた。

そんな田舎に18年前、東京から新規就農者として移住、いわゆるIターンをしたのが私の両親であり、子育てと共に自然農法を実践し、地元のスーパー、直売所、インターネットで作物を販売して生計を立てている。

私も小さい頃からよく畑に連れていってもらい、両親の働く姿を目の前で見ていた。地域の人からは、不思議な目で見られていた。地元から出て行ってしまふ人はいても、都市部から移住して来る人は、私の両親以外おらず、めずらしいことだったのである。移住したての頃は、農村独特の風習や文化、価値観に慣れるのが大変だったらしい。今、ようやく移住18年目で、メディア等で田舎暮らし、Iターン、有機農業などが取り上げられることも影響してか、声をかけてくれる近所の人も出てきた。

私の家の近くに、年の近い友達が数人いるが、その友達はみんな近所に親戚や知り合いがいる。しかし、私の家族にはおらず、すぐに頼れる人がいない。

第21回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール「日本銀行総裁賞」を受賞

◎タイトル『自分の足元から考える環境と経済の両立』

NPO法人 世界遺産アカデミー

『世界遺産×SDGsチャレンジ！小論文部門』

高校生の部で「最優秀賞」(1名)を受賞。

◎タイトル『自分の足元から意識する世界遺産地域について』

論文のタイトルは「自分の足元から考える環境と経済の両立」。自分の住む阿見町で耕作放棄地の増加や、少子高齢化による地域の担い手不足といった課題を洗い出し、地元の自治会費の使い道を調べた体験を基に意見をまとめた。「自分の考えを経済や金融と結び付けるのが難しかった」と振り返る。審査員からは「自分の経験と地域の状況を踏まえた考察」などと講評された。

同コンクールは金融広報中央委員会が主催し、社会問題を金融や経済でどのように解決するか考え、学びを深めることが目的。全国から1587点の応募があり、入賞20点の中から齋藤さんを含む5点が特選に選ばれた。

同校で9日、賞状の授与式があり、日本銀行情報サービス局長の小牧義弘氏や、日本銀行水戸事務所長の上野淳氏、千葉繁阿見町長らが出席。小牧氏から齋藤さんに賞状と副賞が手渡された。小牧氏は「身近な所から問題意識を持ち、解決策を提言していた。中身も展開も小論文として完成度が高かった」とたたえた。齋藤さんは「将来は自然と人間が共生するまちづくりに携わりたい」と話した。特選に選ばれた生徒が在籍する学校として、同校に「学校賞」が贈られた。(松原美美)

同校で9日、賞状の授与

日本銀行総裁賞に輝いた齋藤彩葉さん(中央)と下田陽一郎校長(右) 霞ヶ浦高

日本銀行総裁賞に輝いた齋藤彩葉さん(中央)と下田陽一郎校長(右) 霞ヶ浦高

④

2014年「国際家族農業年」(IYFF)
@小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン

2019~28年「家族農業の10年」(UNDFFF)
@家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン

家族農業に関する国際社会の主な動き

2008年	世界経済危機・食糧危機発生、国際農民組織が「男女の権利宣言」を公表 国際非政府組織(NGO)が「国際家族農業年」の設置を求める運動を開始
2011年	国連総会が「国際家族農業年」(2014年)の設置を決定
2014年	国連「 国際家族農業年 」、世界各地で家族農業関連イベント相次ぐ
2015年	国連の持続可能な開発目標(SDGs)誕生、家族農業がSDGs達成のカギとして位置づけられる
2017年	国連総会が国連「 家族農業の10年 」(2019~28年)の設置を前回一致で決定
2018年	国連総会が「 農民と農村で働く人びとの権利宣言 」を採択



グラツィアーノ・ダ・シルバFAO前事務局長 「家族農業以外に持続可能な食料生産の パラダイムに近い存在はない」



●持続可能な開発目標(SDGs)(2016-2030年)

⇒小規模・家族農業が中心的役割を果たすことを期待

家族農業の10年
=地球のための10年



United Nations
Decade of

**FAMILY
FARMING**

2019-2028

◎2017年6月設立

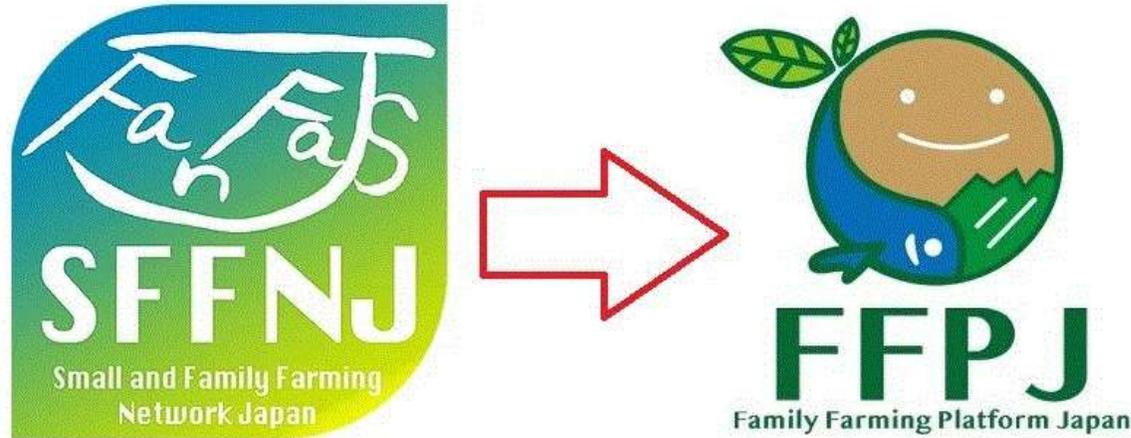
小規模・家族農業ネットワーク・ジャパン

(Small and Family Farming Network Japan : SFFNJ)

◎2019年6月設立

家族農林漁業プラットフォーム・ジャパン

(Family Farming Platform Japan: FFPJ)



- 国連が推進する小規模・家族農業を中心とした政策に転換し、家族農業と農山漁村を支えていくことを求め、マルチステークホルダーによる政策対話の場を作っていく

●国連2014年「国際家族農業年」(IYFF2014)



セミナー報告 国際家族農業年と 人びとの食料主権



主催：上智大学グローバル・コンサーン研究所 協力：APLA、ATJ
セミナー「国際家族農業年と人びとの食料主権－国連食糧農業機関
(FAO)のパラダイム転換を学ぶ」(2014年6月14日)報告

家族農業こそ世界市民の最先端

一反百姓「じねん道」 斎藤博嗣

斎藤博嗣(さいとうひろつぐ)です。2005年に東京から茨城の農村へ移住しました。一反百姓「じねん道」の屋号で、妻と子供2人と共に家族4人、世界一小さい百姓「One Field Farmer」を実践しています。

私が農業に関心を持つようになったのは、27歳でサラリーマンを辞めて、NGO主催の地球一周船旅中に寄港地のキューバで有機農業を体験したのがきっかけです。その時に、キューバで大切にされている哲学であり教育方針でもあるホセ・マルティの言葉「朝にベンを持ちたら、午後には耕せ」に感銘を受けました。勉強ばかりではただのインテリになってしまう、土に触れることの大切さを説いているのではないのでしょうか。もう一つ、マルティの言葉に「たとえ酸っぱくともそれがわれわれのワインである」

自らの民族のアイデンティティの大切さを食(ワイン)を通して表現しているのが魅力的ですね。たまたま本日6月14日は、「チェ・ゲバラ」の誕生日です。



多様な可能性をもつ家族農業における「教育」の視点から

国際家族農業年にあたり、FAO日本事務所長チャールズ・ポリコ氏が「私と家族農業－個人的な経歴から」(JAICAF発行の『世界の農林水産』2014年春号)の文章で、「1970年代初めにコンゴ民主共和国の国家元首の発した、公務員に対し土地があれば自分達の食糧を自ら生産することを要請し、国として食料の自給を達成することを目的とした政策指針に、小学校の校長だった父と家政学を学び教えていた母は従った。当時10歳に達していない私は生まれて初めて、空いた時間に両親や兄弟とともに畑で働くことになった。それは、子どもの頃より、家族農業が、大変な作業や責任の共有によって強まる家族の絆、コミュニティの信頼と平和、知識の交換・移転、生物多様性、その他多くのことをもたらすことを私に教えてくれた生活であった。『田舎め

家族が、自立した個人が集まるチームとして農業を通し連携していくこと、個性を発揮する家族農業の絆こそ、これからの時代を生き抜くカギとなると私も思います。私は家族農業を「家庭自給生活」と呼んでいますが、その最も重要な視点は、家庭で食を自給できる安心感はもちろんのこと、仕事と生活のバランスの中心「家庭＝家族」に、農(自然)を取り戻すことです。暮らしが仕事・仕事が暮らし、鎌一本、鋤一つ、手足腰く五感を使う野良仕事をすれば病気知らず。野草、山菜、野に育つ穀物、野菜を食して医者いらず。田のドジョウ、畑の草が先生で、ここが学校、青空教室。山林はエネルギーの宝庫。子ども達が育つ場として、親として自分が育つ場として……。家族との時間を大切に家族農業にはすべてが備わっているといっても過言では

スペイン・バスク地方ビルバオ市(2019年3月25~29日)

第6回世界家族農業会議

「家族農業の生活を改善するための10年」





▶若い生産者のプレゼンテーションとして、 たくさんの報告、提言、質問

●ジャマイカの農民

「私たちが直面しているのは、農の現場や農村に若者が少ないということだけでなく、**世代継承**。

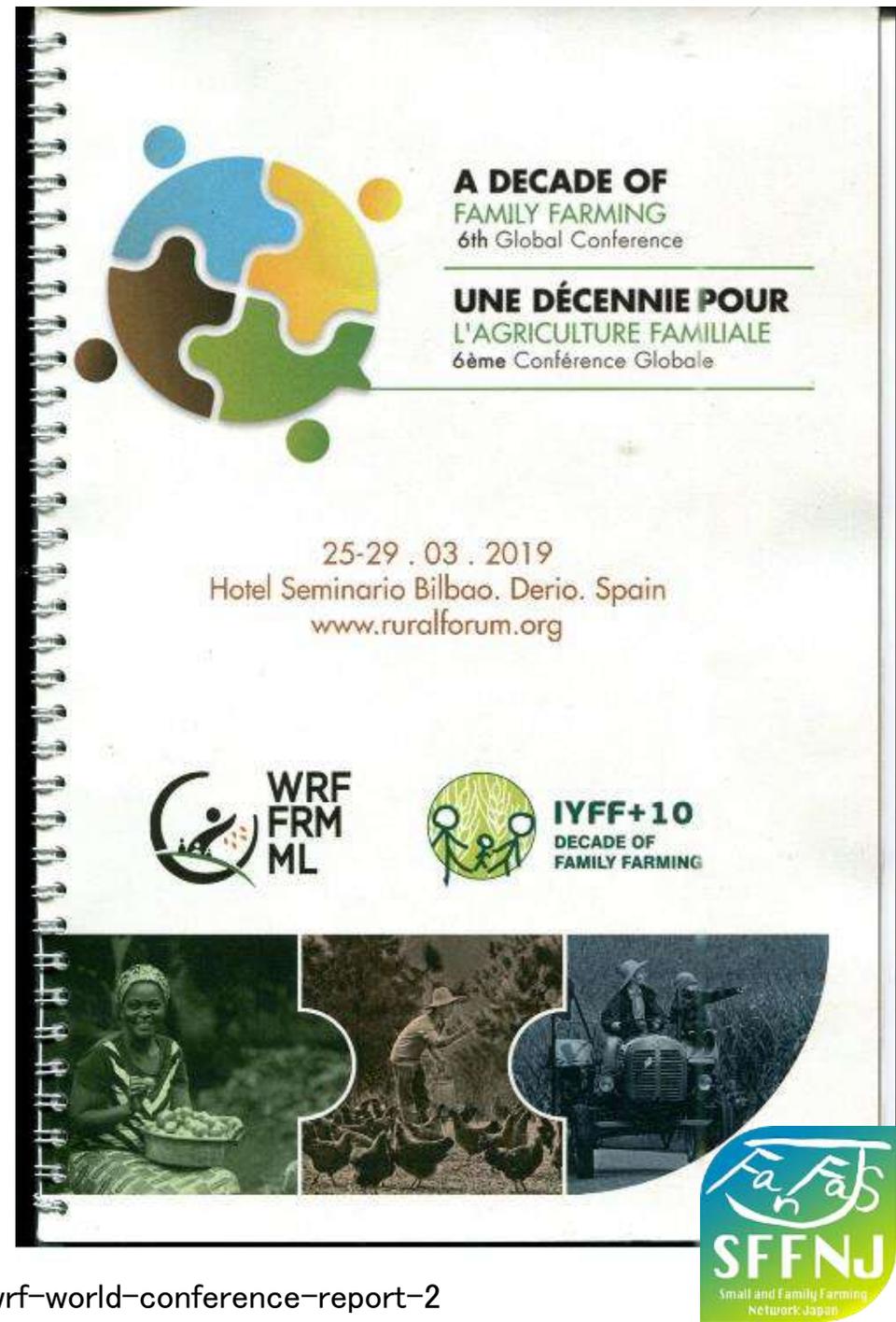
トレーニングはあるが、戦略というものがなく、皆外に出て行ってしまふ…。

農村の人々が離れていかないように、**一緒に働く、協働**していくことが大切」

●フランス青年農業者協会

「EU の家族農業の定義は、工業的な規模ではなく、**人間的な規模**であること。農家の社会保証の改善が必要で、地域の価値を守っていくこと。

新しい農業、**アグロエコロジー**(Agroecology: 農業生態学)の支援等を通し、**農家の自立性**を高めていくこと」



⑤

一人の地球市民として

地球市民皆農：農から「善く生きる」

私の提案：

④

CL学習

「カルティベイティブ・ラーニング」

(Cultivative Learning)

自耕的・身体的で永続性のある農による学び



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

上智大学 基盤教育センター
身体知領域

全学共通全学共通・高学年向け科目

●担当授業科目

『食と農と身体／FOOD AND AGRICULTURE
THAT THINKS FROM THE BODY』

▶授業タイトル

地球市民皆農
農から「善く生きる」

CL学習

「カルティベイティブ・ラーニング」
(Cultivative Learning)

自耕的・身体的で永続性の
ある農による学び





Q.受け身で机上の知識を覚える学習者から、主体的に活動する実践者への道を開き、自分と周りの環境・地域に自ら働きかける「総合的な人間力」の全体像をつくる生涯学習の土台には、どのような学びが必要か？

Q.総合学習で「農と食」に関わる授業事例は多いが、それは「生きる力」を構築する学びに結びついている？

Q.例えば、農学は「総合科学」(生物学、化学、物理学、工学、生態学、地球科学、社会科学、人文科学など)を指向する学問といわれるが、「農」の持つ総合性を生かすには、何よりも田畑山林の現場において全身感覚で身につける 実践「生きた学び」が必要ではないだろうか？

「文化・教養:カルチャー(Culture)の語源は、耕す・農耕」

- 「文化・教養」を表す「カルチャー(Culture)の語源は、耕す・農耕
自らの手足腰・五感を使って大地を耕すことは同時に、カルティベート
(Cultivate)「耕作する、栽培する〈才能・品性・習慣などを〉養う、磨く、
洗練する、修める)＝「自らの心身を耕す」力を引き出す
- 「いのちを育む」生命産業である農業:アグリカルチャー(Agriculture)
は、農産物を生産するだけではなく多様な学びを内在
- ▶「農」は「生きる力」の全体性を再構築する哲学であり、
一人ひとりにとって生涯に渡る、根源的で普遍性のあるテーマ

アクティブ・ラーニング

Active Learning

能動的

活動的

積極性

目標達成・期間(ゴール)設定化

カルティベイティブ・ラーニング

Cultivative Learning = CL学習

農動的

循環的

身体性

繰り返す四季のごとく継続・永続化

私案「カルティベイティブ・ラーニング」(Cultivative Learning) CL学習概念

自耕的・身体的で永続性のある農による学び(10EE)

1. Ecological Enviroment

生態的環境

2. Economical Energy

経済的エネルギー

3. Endless Engagement

生涯現役

4. Essential Education

本質的な教育

5. Engrossing Earth

魅惑的な地域

6. Excellent Eats

魅力的な食事

7. Echoing Empathy

互いの共鳴

8. Elegant Esprit

エレガントな機知

9. Elaborated Effort

磨きをかけた努力

10. Eternal Empowerment

永遠のエンパワーメント

創造的な「知」の源泉は、「地」にこそある

地球市民皆農
農から「善く生きる」

ウェル・ビーイング
(Well-Being)
「身体的・精神的・社会的
に良好な状態」
を生涯に渡って高める

CL学習:意義 「地球と私たち」をつなぐ、農から「善く生きる力」を学ぶ

●地球と人間の接点である「農」は、生物としての人間の存在を、最も生き生きと自分の心身に「内なる自然」として実感させるハブ(HUB)「触媒」

・地球は「無限」か？ それとも「有限」か？？

・「地球市民」としての自覚・・・「人間中心主義」→「地球中心主義」へ

地球や太陽・月あらゆる生命の「根源の力」に根ざしたCL学習

- ・植物の種子(タネ)はどこからやってくるのか？
 - ・発芽する力、根をはる力とは何か？
 - ・茎や枝を伸ばす力はどこへ向かうのか？
 - ・葉を茂らせ、花を咲かせ、実やタネを結ぶ力とは？
- ▶人間の「生きる力」とは何が違うのか？

生物から直接学ぶ
「農と食と身体」

●一人ひとりが「農」から「善く生きる力」を学ぶ意義は、言葉や文字や映像によってのみ対象化される教育ではなく、=自ずから(おのずから)生きようとする力=自然(じねん)の力」に根ざした学習者主体の環境をつくる

新自由主義



新“自給”主義

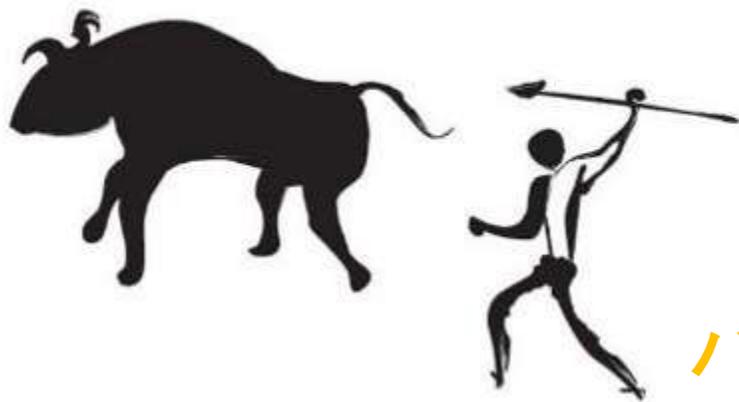
=

「CL学習」全世代型

「地球市民皆農」社会

太陽、水、土、種、「そこにある」ものを育て花を咲かせる農

追いかける狩猟的なビジネス



パラダイムシフト



育てる、農耕的な
手仕事＝百姓

すみか

地方創生と人生100年時代、地域と地球を住処とする永続可能なライフコース

CL学習 : 目標

「地球市民皆農」社会

- 農(業)の源流「自耕・身体」を探ることは「生きる力」の源泉に立ち還ること
- 自耕的・身体的な農をベースにした自然体験のなかで、自分自身が「何かを生み育てる力」を秘めた存在であることを見出す
- **CL学習**は「誰か」の考える・教える「“統合”教育」から出発するのではなく、日常に生活する一人称としての「自分(自耕)」から出発
- 自ら耕すことはライフスキル(生活力)を養成し、本当の自己肯定感を育み、ウェルビーイング(Well-being)「身体的・精神的・社会的に良好な状態」を生涯にわたって高めることに役立つ⇒ 全世代型「地球市民皆農」社会

▶ **CL学習** 自耕自作で「自らタネを蒔く人」になり
「自らを描き、意味づけ、善く生きる主体者」が育成される

「地球と私たち」をつなぐCL学習

地球市民皆農～農から「善く生きる」を学ぶ

農業や農村、食や農、食糧危機、飢餓、貧困、地球温暖化、戦争という問題があるのではなく、人間という問題が厳然として残っている。

田畑を耕して農作物を作ることに加え、
農・農村・農業がもっと見直されることを願いつつ…。
地球という自然に寄り添う根源的な生命産業として、
真に人間性の回復ができる働き方・暮らし方として、
そして、先の見通せない混迷する時代に、
老若男女、全世代型の「地球と私たち」をつなぐ学習として
自耕的・身体的で永続性のある農による学び「CL学習」が
地球市民皆農～農から「善く生きる」学びとなりますように！！



農林漁から善く生きる「一人の地球市民」として・・・

■テーマで探究 世界の食・農林漁業・環境(全3巻)農文協



農林水産業はいのちと暮らしに深くかかわり、地域、森・里・川・海、日本、さらには世界とつながっていることを、「問い」から深めるシリーズです。

本シリーズの特徴

食べることや農林漁業に関する「当たり前」を問い直し、第一線で活躍する研究者たちが、データも交えてわかりやすく解説。身近な衣食住と農林漁業のかかわり、環境や文化、SDGsとのかかわりを、問いから深めます。

取り上げるテーマ

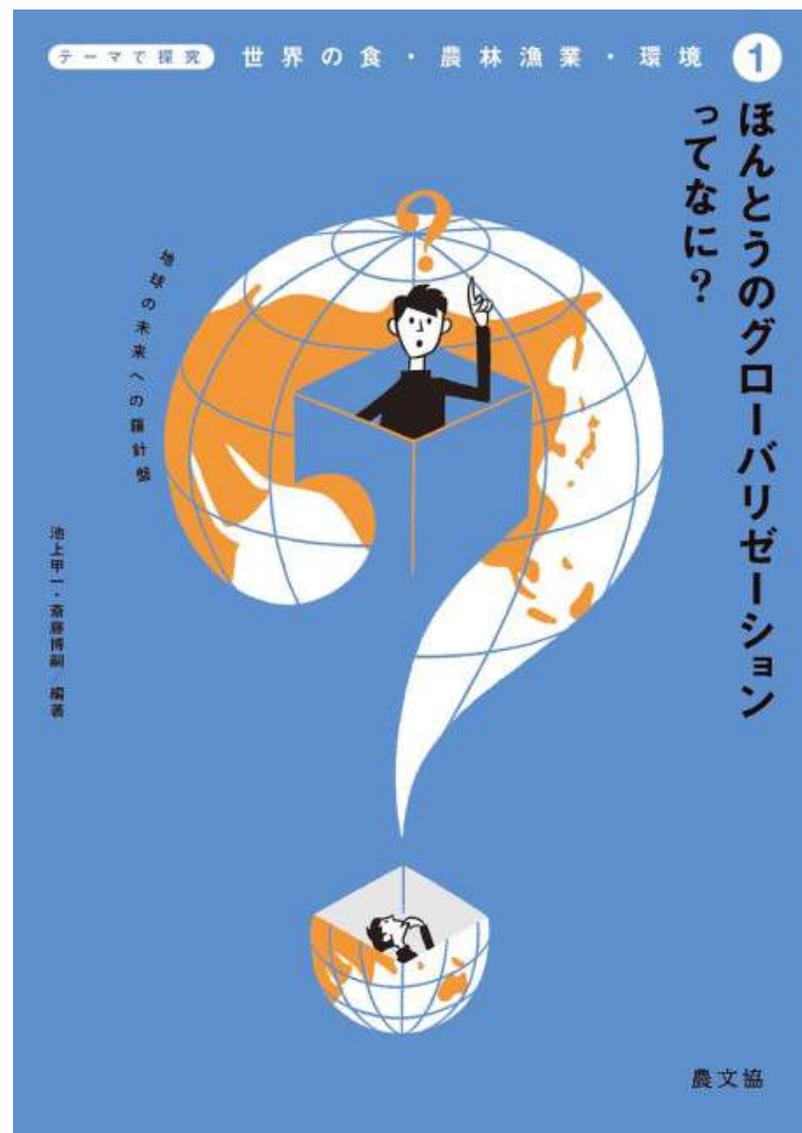
気候変動、生物多様性、紛争と難民問題、再可・お茶・大豆からたどる日本の食卓、バーム池のフロンティアをめぐる諸問題、陸域内などのフードテック、海洋プラスチックごみ、バイオエネルギーと林業など

編著者

- 1巻 池上甲一 (近畿大学名誉教授) 斎藤博嗣 (農家・じわん道)
- 2巻 関根佳恵 (愛知学院大学教授)
- 3巻 二平章 (茨城大学客員研究員) 佐藤宣子 (九州大学大学院農学研究院教授)



農文協



ほんとうのグローバリゼーションってなに?

『ほんとうのグローバリゼーションってなに?』
地球の未来への羅針盤
池上甲一、斎藤博嗣 編著

『ほんとうのサステナビリティってなに?』
食と農のSDGs
関根佳恵 編著

『ほんとうのエコシステムってなに?』
漁業・林業を知ると世界がわかる
二平章 編著、佐藤宣子 編著

農文協

ご清聴ありがとうございました



さいとうひろつぐ



Email: hiro-saito@sophia.ac.jp (上智大学)
: saito.hirotsugu.1974@gmail.com (個人)